

平成24年度 第4回教師力アップセミナー

植草学園大学教授 野口 芳宏 先生
平成24年10月8日(月・祝) 10時～
於 大町立大町中学校ランチルーム

国語の模擬授業「すがたを変える大豆」

記録 土井

よくいらっしゃいました。

自分の時間とお金を使ってこういう勉強会に来る人はそれだけで一流と思っている。ありがたいことに、私はこれまで一級の先生方とばかり付き合っている。光栄だ。熱心な方々に、今日の1日のお付き合いが役立つようにと願っている。

改めてすごい部屋だ。これがランチルーム。こういう所で食べたらおいしい。学校という雰囲気でない。ホテルみたい。

こういう設備で教育がなされて、子どもが良くなるといい。(笑)

私らはストーブなんて物語の世界。寒々とした教室で過ごした。4年生が終戦の時。日本の歴史でどん底だった。それが私の小学生時代。しかし、今の恵まれている子どもたちと、学力はさほど差がない。教育は設備ではなさそう。

松下村塾は粗末な建物。そこから明治を動かしていく俊才が次々に出てきた。

さて今日のこれ以降は国語、「すがたをかえる大豆」で勉強していく。

全部で、9段落になる。番号を振ってほしい。・・・8か。教材が書き直されたのか？

確認してみよう。「わたしたちの」が1、・・・、「このように」が8、「大豆のよいところ」が9(ホ～という声)

面白い話だ。教材は完璧ではない。おそらく現場の声を聞いて、出版社で変えた。

なるほど、9段落めは独立させるほどじゃない。よくなった。

国語、社会、算数・数学、理科・・・。教科は9つある。

一番大事な教科を一つ挙げろというと、何を挙げるか？ノートに書いてほしい。

国語以外を書く人はそうはいない。大方は国語と書く。数学の先生の集まりでも、英語の先生の集まりでも、聞くと国語と書く。

この国語のことを筆頭教科という。

国社算理・・・順序は決まっている。国語が一番だ。しかも、最大の授業時数をもっている。低学年では9時間、5日しかないので、1日を除いて毎日2時間やっている。低学年の半分は国語の学習だ。

では、国語の学力について考えよう。今のみなさんの学力は、小中高の国語の授業で付けられたか？その自覚があるか？

それとも、新聞を読んだり、テレビを見たり、好きな本を読む、会話もする。そういった生活の中で学んだのか？

国語の授業で身に付いたと思った人は○、そうでないと思った人は×をノートに書いてほしい。

これを、「選択的発問」という。どちらかを選ばせる。受け止める方はやさしいので、子ど

もにとって取つきやすい。授業する側は鮮明な差が確認できる。

「どんなことを感じたか言ってもらいましょう」では差が曖昧になる。

どう思うか？

○だと思う人。この人は理想的な手の挙げ方だ。手は曲げるものではない。

×だと思う人。断然×が多い。ざっと5対1で×。

残念だ。筆頭教科で一番授業時数が使われていて、これではだめだ。

今、×をつけた人は、良い国語の授業を受けてこなかった。責任はみなさんにはなく、みなさんは被害者。しかし、20年後に、私がこうして同じ事を聞いて同じ事になったらそれはみなさんの責任だ。(笑)

わたしは、これを「効力感」と言っている。効力感が高い授業をしなければならない。

効力感がない授業には国語と道徳が多い。

算数や理科はそうか。聞いてみよう。

算数や理科を、「授業で身につけた」に○をつけた人は？(ほぼ全員挙手)

この通り、歴然と差がでる。他の教科は効力感が高い。そこで私は、効力感が高い国語の授業をしなければならないと思っている。つまり、学力形成が明確でなくてはいけない。

これから、模擬授業で勉強していくのは、まっしぐらにここへ行く。

「学力の形成」って何だ。

変わるということ。授業前の子どもと後の子どもが変わるから、学力が形成されるという。

こういう「変容」というのは、外から見ても変わったと分かる。それは、望ましく変わらなくては行けないので、「向上的変容」という。

しかし、効力感が薄い授業はこれがない。分かっていることを、念のためと、「なぞりと確認」が多い。

どうしてか？何を教えるかという指導事項が国語は分からないからだ。

算数・数学は何を教えるかが明快だ。教育実習生に何をやるかという「算数を」という。

「国語で何を教えて良いか分からない」というのは、教師になってからも、さらには退職するまで続く。だから、国語の授業で効力感を感じないのは当然だ。

「花子さんが、リンゴを8つ持っている。太郎もリンゴを9つ持っている。合わせていくつかな」というと、17になる。

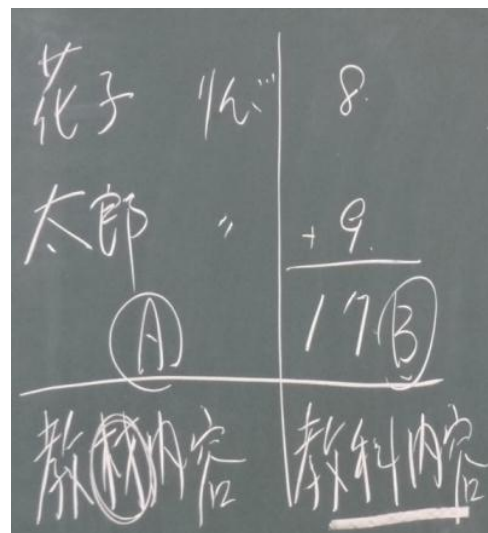
1年生がこういう勉強をして家に帰り、母が「何勉強したの？」という、「花子と太郎のこと」という、「違うじゃないの、それは国語でしょう」と言う。「リンゴの勉強」という。「違うじゃないの。それは理科でしょ。」という。あるいは生活科。

「 $8 + 9 = 17$ 」という、「そう、繰り上がりのある足し算を勉強したんだね。よかったね」となる。

この会話の中の、左側を教材内容という。右側が教科の内容。

学力はB。Aは材料だ。

国語は何やったの？



「おおきなかぶをやった」、「昨日もおおきなかぶ」、「明日もおおきなかぶ」(笑)

「おおきなかぶで何勉強したの?」「抜きたいのでおばあちゃんが来た」「明日は?」「たぶん孫が来るらしい」(笑)

それはA=教材。お母さんが聞きたいのはBだ。となると「何?わかんないよ」となる。

この会話は、職員室でも同じ。「今日は大きな株をやった。孫が抜いた。」(笑)

何を教えたの?先生も答えられない。

そういうことが続くから学力が付いた実感がない

「すがたをかえる大豆」が題材名。

「説明の仕方を考えよう」これが単元名。単元名が単元の目標になっている。

さて、どんな学力を付けたいのか。

この題名(「すがたをかえる大豆」)で学力を形成できないと言う人は×、できるという人は○をつけてみよう。

当事者全員が、常時全員参加するためには、ノートに解を書かせること。書けというあとには、「まだ書かない人がいるか」と続ける。

ここで、○をつけた人。

例えば?(指名)

A「姿を変えると姿が変わるとどう違うか」・・・助詞の指導だね。

A「大豆が何に姿を変えるか予想させる」・・・これは意味ない。やめた方がよい。

よくそういう学習活動があるが、学力が形成されることはない。

A「筆順」・・・なるほど。それは学力形成。

A「いくつかの姿を変えるのを例示して最後に・・・」・・・それは題名ではなくて本文の学習。

A「本文を読まないで、題名をいったときに何をうかべるか」・・・それは生産的な学習にはならない。

A「大豆を知っているか?」・・・だいたい知っているだろう。「大豆を知っている人」はなぞりと確認だが、確認も時には大事だ。

私ならどうするか、こうやってじらして言う。(笑)

(「姿を変える大豆」と板書する。)

こういう題名。教育のために使う題材だから、教材。

読んでみよう。(一斉に読む)

よく読めたね。教えていないのに。(笑)

どうして読めた?

A「教科書にひらがなで書いてあるから。」

子どもは、見当をつけたから。私は、1年生を教えるときも漢字で書く。「よく読めたな」という。「6年生だって読めない。すごいね。誰のおかげだ。」という。(笑)

そうすると、野口先生のおかげだよという。自覚させておかないと。(笑)

「姿を変える大豆」

一緒に読んでみよう。

漢字なんて、上と下、左と右に分かれるんだ。その順序を筆順と言う。

言ってみよう。「ひつじゅん」、もう1回、「ひつじゅん」

筆順のきまりを覚えると、読めない字も書けるようになる。ルールは2つしかない。左から右へ、上から下へ。上と下で分けるとこっちが先でこっちが後、一緒に書いてみよう。

そら書きをしよう。一緒に、「イチ」「ニ」……………。

書いてみよう。ノートに書けるかな、書いてみよう。

3年生で「姿」という字は誰も書けないよ。誰のおかげだ(笑)

「変える」も書けるんだ。書いてみよう。1, 2といいながら、書いてみよう。

そのとおり。

「姿を変える」ってなんていう？

幼稚園では言えない。誰か言える？

A「変身」 見事！

「姿を変える大豆」は大人の言葉では「変身する大豆」という。「大豆の変身」でもいい。ところで、大豆を見たことないひと？(いない)

大きいか小さいか？ A「小さい」、A「中くらい」(笑)、A「比べるもので違う」

そういうへ理屈をいわない。(笑)

「豆粒みたい」というのは、例えで使う。小さいのに、なぜ大豆と書くの？

分からない人。手を挙げていない人はわかる人だから聞いてみよう。

分からない人、「分からないことが分かるのが」大切。

「分からない」というのは、恥の表明ではない。これから学力を付けるという意思の表明だ。

「分からない」と言った子をうんとほめる。

逆に、分からないのに「分かると」という子の傲慢さをつぶす。

分かることが楽しいと思うには、わからなきの自覚が大事。分かりたいと思うことが成長に繋がる。

ほとんどの人が分からない。

A「大切な豆なので、大豆と書く。」

そう。こういうのは、知っているわけではないけど、学んだ知識を応用している。これは大事なこと。これを「見当をつける」という。別の言葉で「推理」。今までの知識を動員して道をつけることだ。

A「豆の中で、大きい部類にはいるから。小豆が小さい。」

この見当のつけ方が良いと思う人は○、思わない人は×。×の人は批判的に聞く力がある。(笑) ○の人は、人がいい。(笑)

空豆、黒豆に比べて大豆は小さい。豆の中では標準の大きさだ。

そこで、大豆は何か。大きいということではない。立派ということ。「大作」は立派な作品。「大人物」は大きい人ではなく、立派な人ということ。「大豆」は立派な豆ということ。なぜ立派か？変身できるからだ。こうやると、題名だけでも学力が付く。

学力とは、こうして判定できる。「形成の判定」(板書)

形成したかどうかを判定する、

1 入手 獲得

新しいことが分かれば分かったほど学力が付く。教科書でひらがなだから、漢字で書く。姿を変えることを「変身」というだ。大きくないのに大豆。立派という意味なんだ。

「そうか」、「へ〜」が多ければ、「入手」「獲得」が多い授業。

詰め込んでいけないというがウソ。詰め込んでも落ちる。詰め込めないときはたたく。たたき込めば入る。つめこみ、たたきこみがあるのはよい授業。

自主的・自立的で子どもが伸びるは大ウソだ。子どもが自発的に読むのは、漫画か図鑑だ。みなさんは現場の人だから、学者の言うことにごまかされてはいけない。

入手、獲得が多ければ多いほどいい。

2 訂正、修正 も多ければ多いほどよい。

まちがってもいい。訂正されるのは大事だ。

今、日本中で、「子どもの考えは訂正しないようにしましょう。」という考えがはやっている。だからよくならない。

間違いを直すのが教育だ。訂正すると傷つく？そんなやわでこれから大きくなれるか？人は、否定されることによって気づく。間違いを「違う」と教えてくれることはありがたいこと。

傷つくということは、たまにやるから傷つくのだ。いつもやっていたら傷つかなくなる。

(笑) それを「鍛える」という。子どもは鍛えなくてはだめだ。

オリンピック選手なんて、どれだけ鍛えるか。いい加減な甘やかしの言葉でごまかされてはだめだ。わたしはこれを「否定の生産性」という。否定は人間の成長に大事だ。

3 深化 統合

「分かっている、理解している、知っている」だけど浅いときがある。もっと深めるのを、深化、統合という。

4 上達 進歩

練習するとクロールも長く泳げるようになる。それが上達であり、進歩。

だいたい、この4つになる。

陰山英男さんが「徹底反復の会」を作っている。身につけても、はがれたらしょうがない。繰り返すことによってしっかりと身につける。反復定着までくりかえす。それが学力。そこで、

5 反復 定着

ここでやめようと思っていたときに、PISA 型の学力がでてきた。ここで6番。

6 活用 応用

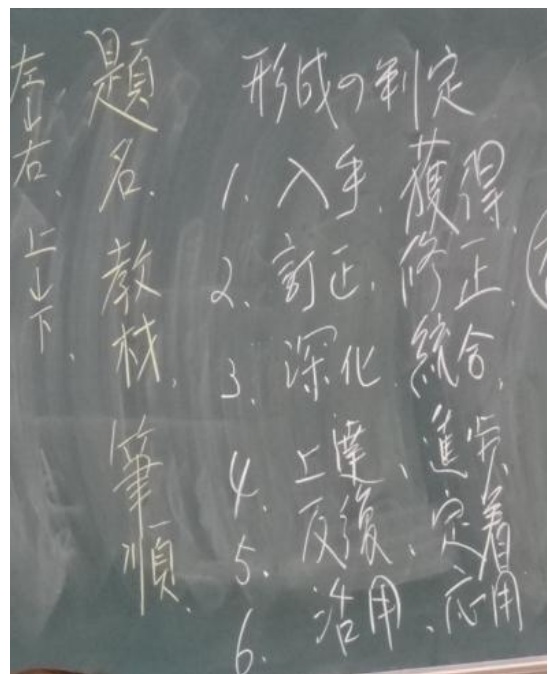
これがあるのが学力。振り返ってみて、あるかないかを見極めたい。

この6つをわかっていただく形で読み進めていこう。

第1段落 範読

この1段落で、どんな国語の学力が形成できるか。

(間)



こういう学力があると箇条書きにしてほしい。たくさんあるほど、学力が形成できる。題名での学びを活用することが必要。数が多ければ多いほどいい。「多々 益々 弁ず」という。とりあえず、第1段落だけにしておこう。(静寂)

・・・良いですね、この静かさは。この静寂は実のある静かさ。

いくつぐらい学力を形成する種を見つけたか。手は挙げる。曲げるではない。1つの人？ 少数、2つ やや少数、3, 4 多数、5 やや少数、6 少数、7以上 数人

森 信三先生を知っているか。知らないのは関西ではもぐりといわれる。神戸大学の哲学の先生で、小中の先生には大きな影響を与えている。

森先生のしつけの三原則がある。

「返事、挨拶、履き物そろえ」

なるほど、いつでも望ましい返事ができる、挨拶ができる、履き物が揃っている。これはすごいことだ。

森先生は、手の挙げ方も言っている。

「真っ直ぐに伸ばす、指先までそろえる、素早く上げる」この3つを教室で徹底する。これだけで授業に張りを与える。曲げるも上げるも区別ができないようではだめだ。

7つはすごい。この辺にいましたね。もうごまかせない。(笑) 前で言ってください。

A 「1 筆者が聞いていることがありますそれは何か。」

板書はできるだけ短く。文体加工という。短いほど端的でわかる

A 「2 意外 を使って単文づくり」

A 「3 姿を変えるとというのが題材名。1段落のなかから題材名を見つけて」

短くいうと？

「1段落の中には題名が隠れている。隠れた題名はどこにあるか。」

A 「大豆と同じくらい姿を変えているのは何か。」

変身している食品はということ？

A 「筆者が聞いていることに対して答えている文はどれか。」

A 「調理の意味は」

A 「それは は何を指しているか」

7つ挙げましたが、参考になりました？

こういう事をやってみると、国語の授業は先生によるな。算数は、誰が教えても同じ。国語は、先生によって力が付く・付かないが違う。

第1段落だけで、これだけ教えることができる。

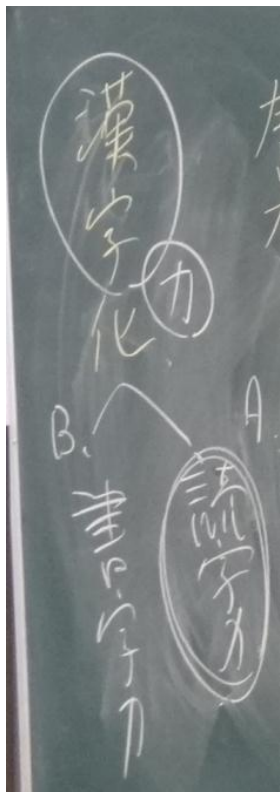
Q 「先生の質問は、漢字とか、そういうことを聞いたのではないか」

A 今の答えは、形としては問いだが、指導事項になっている。

国語は、指導事項の特定が難しい。指導事項が決まっていれば発問づくりができる。あとは精選、取捨。これらも指導事項だ。

あまりくどくなると、1段落だけで3日かかる。(笑)

みなさんは、もっと違うことを書いている。それが国語学力に繋がる。漢字に直せるのはずいぶんある。「やさい」がひらがな。「ひらがな表記の漢字化」。これがひとつの指導事項だ。



漢字力は二つある。漢字を読む力が「読字力」。漢字を書く力が「書字力」。どっちが大事か？

読字力が大事だ。書字力はまあまあいいとして、読字力をつけよう。子どもは、「姿」は書けなくても良いが、読めること。読字力が基礎。書字力は応用。

基礎をやっていると、応用につながる。「やさい」、「ごはん」、「めん類」

「めん類」を交ぜ書きという。交ぜ書きは大人の社会では基本的にない。麺類も黒板に漢字で書いた方がよい。

「めん」は麦でつくるから「麦」、「メン」とよむから「面」、仲間だから「類」

「面」が音符、「麦」が意符。文字の大半は形成文字。形声文字はこうして作られている。

もう一つ大事なことは、いろんな言葉を教える。それを「語彙力」という。

今、指導要領が変わって、思考力、判断力、表現力が大事だと、言語活動を充実して、となっている。

思考力の正体は、語彙を組み合わせること。語彙の少ない人が考えることはたいしたことがない。

赤ちゃんの思考力はたいしたことがない。「おなかすいた」ぐらい。語彙がないから。

国語の授業で、語彙を増やすことが大事。

一般に、どう行われているかという、と、「すがたを変える大豆」を「大豆の変身」となることが大事。

優しい言葉を難しく教えることが語彙力をふやすこと

「わからない」という時、「辞書引いてごらん」というのを「下り坂の指導」という。

「すがたを変える」を「変身」というのが「上り坂の指導」。こうしないと語彙力は高まらない。

「わたしたちの毎日の食事には」を難しくいうと、「我らの日常の食事」というと、勉強した気がする。(笑)

「肉・やさいなどのさまざまな材料」を「食材」という。「建材」、「木材」、「石材」、「教材」、こうやって広がる。語彙力を教えるチャンスを逃さない。「さまざまな材料」だけで、語彙が広がる。

「調理」と「料理」はどう違う？同じじゃない。わからなさを自覚することが大事。(笑)

調理はプロセス、料理は結果、あるいは、料理は製品、調理は加工。

目玉焼きは料理、ごはんは料理、米は食材、パンは食品。食品は食べられる。麦は食材。

「ほとんど毎日口にする」ものを常食という。

抽象語をチャンスをとらえて教えると会話が洗練される。

P27の1行目「なんだかわかりますか」と問い、「それは、大豆です。」と答えている。

「なんだか分かりますか」ないほうがピシッとする。

この文、要らないと思う人は×、いると思う人は○。

○が多い。そう、いるのです。

必要だという理由が言える人は手を握る。

A「強調している」なるほど

A「興味を持たせる」そういうこと 一つのテクニック。

人は、問いかけられると積極的になる。

「それ」は指示語というんだよ。指し示していることばだから、中身が分からないとだめ。指示内容という。「それ」の指示内容を述べよ。

A「多くの人が毎日口にしてるもの」

そう、「多くの人が毎日口にしてるものは、大豆です」では長い。指示語は便利、文章を引き締めることになる。

「気づかれないのです」は結果、「すがたを変えているので」は原因。原因・結果を因果関係という。

黒板には、白と黄色を使っている。黒板に黄色で書いたことは、教材内容ではない。「教科内容」だ。こういう授業をやると、子どもが家で「原因結果の因果関係を勉強したよ。」というようになる。(笑)

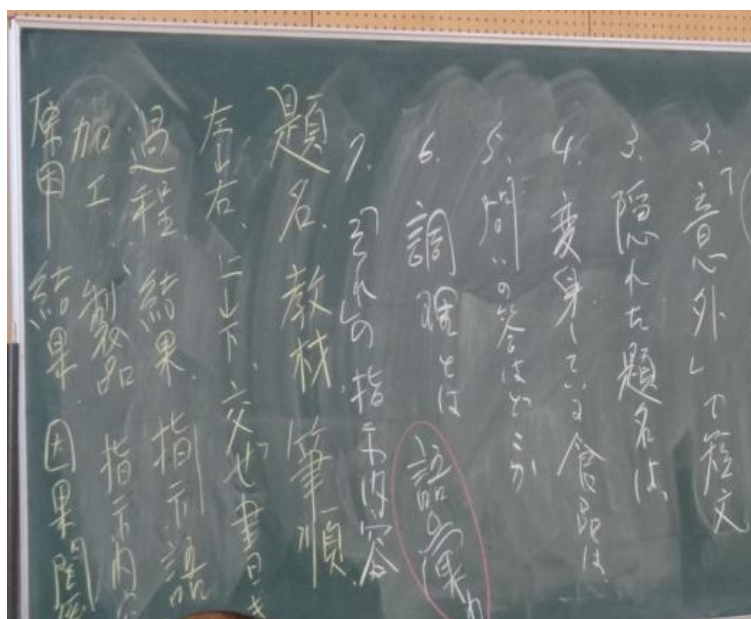
「大豆」は教材内容。国語科は、教科内容の力をつけなくてはいけない。ただし、その教科内容は指導要領に書いていない。教科書は教材集だ。

ところが、最近、教科書は変わってきて、「学習用語」として光村図書は使っている。少しずつ、教科内容に自覚が動いてきている。

これまでのように、何をやっているのか分からなくなることはなくなる。

こんな事やっていたら、日が暮れてしまう。(笑)

後はみなさんが、精選する、厳選する。捨てていけばよい。



第2段落。

「ダイズ」はなぜカタカナか？分かる人は○、わからないひとは×。

A「理科用語はカタカナで書きます。」

学術的な言葉、学名という。動植物はカタカナで書くことになっている。

「植物」の反対の言葉は、対義語という。同じ意味の言葉を、同義語という。女性と女子は同義語。男性と女性是对義語。

植物の対義語は？そう、動物。植物はそこから動かない。植物を教えるには、動物を教えた方がよい。語彙を拡充するために、対義語、同義語を覚えておくとよい。

「たね」の正しい名前は？「実」？それはたべもの。「種子」という。

こうやると国語はハードだと実感する。誰のおかげ？（笑）

「さや」書ける？先生の学力が影響する。「莢」と書く。

刀の「さや」は書けるか？そう言うときのために、これだ。電子辞書。

金額にして60万円ぐらいの辞書が電子化されている。ボタンを押して「さや」、すぐに出てくる。昔は鉄がなかったから、「革へん」だ。「鞘」。知らなかったことを知ることは楽しいこと。

電子辞書はずいぶん持つようになった。自宅にある人？（多数が挙手）

これがだめ。家にあっても役に立たない。（笑）

これは通勤用。「通勤用」とテープが貼ってある。（笑）書斎用、研究室用、台所用など、5台持っている。いつも持ってなきゃだめ。辞書は関心を持ったときに引く。そうすると理解の密度が上がる。今、そのためには、常携、常用。

6行目「かたくなる」はなんていう？「熟成」それは固くなることとは違う。やわらかくなることもある。「凝固」それはかちかちだ。「硬化」がよい。「硬化」という言葉を教えると、「軟化」はペアで教えた方がよい。

ダイズの「硬化」は成長が止まること。身を守るということになる。

「これ」指示語、指示内容を確認する。

隙間のない言葉で問答できる。これが、言語活動の充実。日常化ということ。

硬いダイズ=硬化したダイズは、そのままでは食べにくく、消化は良くない。これを、欠点、短所という。マイナス要素だ。短所を教えたら長所。

人間にとって、固くなければ皆食べられてしまう。ガードで、子孫を残す知恵。

「手を加える」ことを加工という。食品に手を加えると加工食品という。日本は加工貿易で成り立つ。加工という言葉がつながる。

「おいしく食べる工夫をして」は加工食品。食品の変身だ。

3段落

「いったり」漢字で書きましょう。「いる」には2つある。茶をいるのは煎茶。米をいるのは炒飯。ダイズをいるのは？、「炒る」。

「にたり」は「煮たり」、点は火のこと。れっかという。

「豆まきに使う豆」を何て言う？「福豆」という。こういうのを時々聞くと面白い。

「水につける」は、「浸ける」か「漬ける」かの2つある。両方さんずい。ちょっとつけるか、長くつけるかの違いだ。

「おせちりょうり」は「お節料理」。「お」は接頭語。丁寧語。本当は節料理だ。

こうして習っていない漢字を使うと、「習っていない漢字はひらがなを使うように」という頭の固い指導者が時々いるので、気をつけないと。その指導者が帰ってから漢字で書けばよい。（笑）

に豆には、黒、茶、白等、いろいろある。ここでは、黒豆もダイズの中に入っている。

以上のように、学習用語、教科内容、教材内容、学力形成の判定要素を、实例を使ってやってきた。そろそろみなさんも限界。（笑）この辺で質問、反論、批判があれば。誤解をなくしてお昼にしましょう。

Q 「教えたことに対して評価をしたい気はする。漢字のテストをしても良いか」

A 読むことの評価は良いが、書くことは良くない。読むことも、参考のために。
あくまでも発展的、応用の話。

Q 「音読の指導はどこでやるか」

A 1年生で徹底する。勉強の劣等感は、音読から始まる。個別指導でないとだめ。不得意な子呼んで丁寧に教えないといけない。

ポイントは、範囲を限定すること。音読の原理を身につければ他にいっても大丈夫。

「めづらし」が大切。読めない子は下を見ない。「大きな」のときは、目は「株」についていなきゃいけない。めづらしの訓練が大切だ。

これらは、著書『音読の作法』に書いてある。

ただし、学習用語は、市販されていない本もある。作っても売れないから。「学習用語」をまとめて、こういう機会に頒布している。後で見てほしい。

Q 「板書で困っている。ポイントを書いて写させるとなぞりになる。」

A 要約は良い。単元目標に、説明の仕方を考えようとする。ダイズの変身は、4つくらい出てくる。

3 いちばん、4 次に、5 また、6 さらに

板書は、構造を書かないといけない。

黒板は消すことも大事だ。有田先生は、ウソでも本当でも書いていく。子どもに違うといわれてから消す。消されて直されていく。

Q 「カタカナで書くのは学名といわれたがダイズは和名では」

A 文学作品の中では漢字で書かれている。学名ではなく和名もカタカナで書く。訂正したい。

Q 「音読の質問があった。1単元をどのように」

A まずは通読。音読という指導になると、指導の重点が違ってくる。

「すがたを変える大豆」は題名。「国文牧衛」は筆者。本文と読み分ける。

題名は大きくゆっくりよむ。作者は小さく読む。その次は、うんと間をとる。「わたしたちの」という冒頭は、小さく静かに読む。これが、音読の指導。

言語活動の充実は、活性化と違う。「静かにしなさい」と注意するのは活性化のしすぎ。充実はしていない。

言語活動には、2つある。私的言語活動と公的言語活動。学校で行われているのは私的言語活動。今やっているのは、公的言語活動。

これまで公私の別を教えてこなかった。大学では、公私で変えろといってきた。不自然になる。しかし、価値ある不自然、意味ある不自然だ。これを使い分けられること。改まった形にかえること。